

「オガニック」に熱い期待／新しい時代の価値観到来

谷口吉光（秋田県立大学）

このたび男鹿市で「オガニック農業推進協議会」という団体が新たに立ち上がった（本紙2月9日付）。目につくのは「オガニック」という言葉。これは有機農業の「有機」を表す「オーガニック」と「男鹿に行く」をかけた造語だ。考え出したのは「ひのめ市」実行委員会代表で服飾業の船木一人さん、「こおひい工房・珈音」の佐藤毅さん、「グルメストアフクシマ」の福島智哉さんの3人。3人とも男鹿で生まれ、学校を卒業してからしばらく県外で働いた後、故郷に帰って自営で仕事をしているUターン組である。

「ひのめ市」というのは、JR男鹿駅近くの商店街の一角を使って毎年7月に開かれている自然志向のマーケットで、有機野菜をはじめ地元の食材、カフェ、生活雑貨、衣服などの販売者が大勢出店し、男鹿市内外から若者や子供連れの親子などがたくさんやってくる。「男鹿にどうしてこんなに若い人たちが集まってくるんだ」と驚くような若々しい熱気と楽しさにあふれたイベントである。

そんなイベントを3年続けて開催してきた彼らが提案しているのがオガニック農業だ。「オーガニック」の「ー」を取ったら「男鹿に行く」になるなんて考えた人は誰もいなかっただろう。私も有機農業を30年以上研究してきたが、思いもしない発想だった。

「オーガニックっていう言葉は男鹿のためにあったみたいですね」と彼らに笑って言われた時には、我田引水もいいところだが、若い彼らのセンスと大胆さに笑うしかなかった。とはいえ、彼らの思いは至って真面目で、「男鹿にオーガニック農業を広め、環境にも人にも優しい地域社会を作って子供たちに伝え、観光客や移住者を呼び込みたい」という思いをこの言葉に込めたというのだ。

縁あって、私は彼らの相談役になり、「男鹿で有機農業を広めるにはどうしたらいいのか」を一緒に考えてきた。その結果、有機農業を広めるためには農家を集めて協議会を作り、栽培技術の研修や販路開拓などに取り組むのがいいだろうという結論になった。幸いこの構想に男鹿市とJA秋田みなみが賛同してくれて、先日の協議会設立にこぎつけたわけである。

しかし、協議会設立には予想以上の反響があった。フェイスブックで流したところ、400通もの「いいね」と激励のメッセージが届いたという。

しかし、こうしたオガニック農業への熱い期待は、全国各地の動きを見れば驚くことではない。30代から40代の若い世代でオーガニックや自然農法などに興味を持つ人や自分たちの独自のアイデアで斬新な活動を始める例が飛躍的に増えているという。若い世代にはオーガニックとは農業だけでなく、食べ方や暮らし方を表すシンボルになりつつあるようである。オガニック農業に寄せられる熱い期待は、秋田県にも新しい時代の価値観が押し寄せてきていることの表れだと思われる。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2018年2月25日掲載分に加筆・修正した）